

わい性台リンゴ樹の葉を加害するスグリゾウムシ

富 樫 一 次・林 賢 一*

Ichiji TOGASHI et Kenichi HAYASHI: *Pseudocneorhinus bifasciatus* Roelofs feeds on leaves of dwarfed apple tree, in Kanazawa, Ishikawa Prefecture

スグリゾウムシ *Pseudocneorhinus bifasciatus* Roelofs は、スグリ、リンゴ、イチゴ、ハッカ、柑橘を加害することが記録されている¹⁾。

筆者らは、1984年8月7日に、金沢市野田山の中腹に造成されたリンゴ園で、わい性台リンゴ樹の葉を食害している虫がいるというので調査を行ったので報告する。

調査園の概要

調査を行ったリンゴ園は面積90アールで、祝、ふじ、つがる、およびデリシャス系の品種が栽培されている。

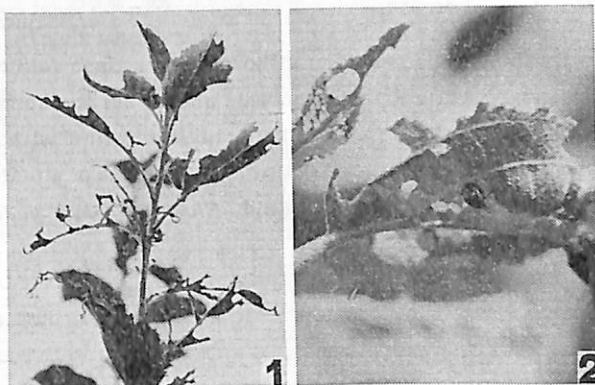
調査結果

園内を調査したところ、スグリゾウムシは主としてわい性台リンゴ樹の新梢葉を食害していたが、時には祝やデリシャス系の品種の不定芽の伸長した葉も食害していた。

園主の説明によれば、スグリゾウムシによる被害葉は6月末より認められるようになり、8月7日までに2回殺虫剤の散布を行ったが、食害する個体数は一向に減少せず、依然として食害され続けているということであった。

しかし、当日の観察によれば、体表面に土を付着させた個体が多く、また採集した個体でも土を体表面に付着させた状態（土も湿った状態から乾いた状態のものまであり、かつ体表面全体に付着した状態から一部に付着している状態までのものを含む）のものから、全く土の付着していない個体まで見られ、その結果は第1表のようであった。

これは、土中で羽化した成虫が地表面に出るとそのままリンゴの樹幹を登り、新梢先端部に達して葉を食害し



第1図 スグリゾウムシによる被害葉 第2図 食害中のスグリゾウムシ成虫

ていたもので、土中より脱出後の日数経過にともない、体表面に付着していた土の状態が変化し、最後は土が体表面より落下したものと推察された。このことは、本種の成虫の羽化が長期間にわたることを示しているようで殺虫剤の効果もないように見られることとも関連しているであろう。

本種に対する殺虫剤としては、パーマチオン水和剤1000倍液の散布がもっとも効果的のようである。

最後に、調査させて頂いたリンゴ園主、山科清治氏と、ゾウムシの同定をして頂き、かつ種々ご教示を賜った九州大学農学部森本桂博士に対し深く感謝の意を表す

引用文献

- 1) 森本 桂 (1979) 果樹を加害するゾウムシ類と対策. 今月の農業. 23(2): 20~23.

(1985年3月12日受領)

第1表 採集した成虫体表面の状況

土の付着した個体	29	(70.7%)
土の付着していない個体	12	(29.3%)
計	41	

石川県農業短期大学 Ishikawa Agricultural College, Suematsu, Nonoichi-machi, Ishikawa Prefecture

* 金沢農業改良普及所 Kanazawa Agricultural Extension Office, Kanazawa, Ishikawa Prefecture